鎌倉市

姉妹都市交流

上田市

プロジェクト

Take Free

2013.11.05

主催：『青色の画布』信州上田上映実行委員会　主管：『鎌倉市・上田市 姉妹都市交流プロジェクト』実行委員会

共催：横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校　後援：鎌倉市　助成：長野県『地域発 元気づくり支援金』対象事業

自立に向かう子

社会的物差しが一つではなくなった情報化社会に突入した昨今。個々の多様なニーズに応えるべく、多くのサービスで溢れ、人々の生きるという行為も「消費」することが目的化しつつある。無論、その社会に存在する学校もその影響を受け、保護者や子どもの多様な要望に対応しようと教員の仕事が年々多忙を極めている。この状況下では、効率化という名の下の教育の「ルーティン化」や保護者や子どもとのトラブルを回避するための「サービス化」がますます加速している。この「遊園地化」する学校においては、心身共にニュートラルな状態で関われる「放課後 的な時間」や、行為と行為をつなぎながら新しい価値を生み出す「原っぱ 的な場所」はますます減少するばかりである。

そもそも学校はなぜあるのか。学校の果たす役割とは。それは「子どもたちや保護者にサービスを提供する場」ではなく、「社会の担い手となる自立した子どもを育成する場」である。言い換えるならば、子ども自らが人・もの・こととかかわり、ぶつかり、試行錯誤するなかで新たな意味や価値を獲得していく経験づくりの場とも言える。

したがって、子ども自らが立ち止まり、思考する環境を意図的につくりだすのが我々大人の役割である。その子が葛藤しながらも主体的に思考したり、行為したりしている状況を大人が価値付け、ときには教えたり、方向付けたりするのが望ましい。子どもが「自立」に向かう環境とは、例えるならば、新雪の道を先頭に立つ大人が踏みしめ、その後を子どもたちが思考停止で行列を成すような構造ではない。大人は、道を逸れながら自分の足跡をつける子どもの姿を見守り、自らの力で新しい道を切り開く環境を整えるべきである。「学校で楽しい思い出がたくさんできた」という子どもたちの意識には、「先生にしてもらった」と「先生がさせてくれた」の二通りがあり、両者には大きな違いがある。前者は受動、後者は能動。その違いは、子どもたちが成長して行くにつれて明確に現れてくる。前者は子どもの中に「思い出」しか残さない。後者は火種として将来主体的に社会にかかわっていく人間を育てる。

「かわいい子には旅をさせよ」という言葉は、今日の学校や家庭、社会の実情からすればもはや死語となりつつある。しかし、子どもの「自立」を考えるのならば、生々しい現実社会から閉ざされた学校空間の中でリアリティのないコミュニケーションを煽ったり、サービスを施したりするのではなく、社会の中で多様な価値と出あいながら「予定調和のない旅」をさせる必要がある。そして、子どもたちが不確実性を受け入れ、仲間と共に可能性を実現していく力を培っていくことが重要である。その環境を保障する我々大人の役割として、学びの場を学校に限定せず、学校と社会が協働して子どもたちの教育に関わっていくことが急務となっている。

鎌倉市 上田市
これまでの姉妹都市交流

長野県上田市と鎌倉市とは鎌倉街道で結ばれ、鎌倉時代は塩田平に幕府の守護所が置かれていたことを背景に、一九七九年十一月五日に姉妹都市提携を結んでいる。以後、姉妹都市交流の一つとして、一九八七年から上田市消防団音楽隊と鎌倉シティブラスの交流演奏会が隔年で開催されている。また、今日では、地元の特産品や名産品を鎌倉の地に集め、鎌倉市と姉妹都市である山口県萩市・栃木県足利市と共に姉妹都市物産展を開催している。

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校では、二〇〇七年度の六年一組が、上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の学習を契機に夏の宿泊学習で同館を訪問し、館主の窪島誠一郎氏との交流の機会をもった。

子どもたちが中学生になった二〇一〇年には、長編ドキュメンタリー映画『無言館』（監督：宮木辰夫一企画・製作：新映株式会社）に出演した。さらに、二〇一一年には中編ドキュメンタリー映画『青色の画布-十五歳、もうひとつの無言館』（監督：森内康博一企画：髙松智行一製作：らくだスタジオ）に出演し、上田市の上田映劇や塩田公民館にて、地元有志の方々の協力のもと三度の上映会を開催した。

附属鎌倉小学校では、この無言館を介した上田市との交流の成果を受け、二〇一二年度及び二〇一三年度の六年生が無言館について学習し、夏の宿泊学習で無言館や信濃デッサン館を訪問している。（髙松智行）

『青色の画布』撮影のため 2007 年以来、約３年ぶりに無言館を訪問した中学３年生。（2011 年４月）

窪島誠一郎さんを鎌倉小学校に招いての特別授業で記念撮影をする６年生児童。（2007 年 12 月）

初めて訪問した無言館。戦没画学生の名前が刻まれた「記憶のパレット」を鑑賞する６年生児童。（2007 年７月）

『青色の画布』上映会（上田映劇）におけるトークショーの様子。左から無言館 窪島誠一郎館主、森内康博監督、企画者 髙松智行。（2012 年 8 月）

信濃デッサン館にて窪島誠一郎さんと交流をする 6 年生児童。（2012 年 7 月）

戦没画学生の作品をとおして「私とは？」「表現とは？」と自問自答する中学 3 年生。（2011 年 4 月）

二〇一一年四月、高校入学を数日後に控えた十五歳の少年少女が母校の附属鎌倉小学校に集まった。彼らは中学校三年間を振り返り、日常、過去、将来への思いを吐露していく。堰を切ったように溢れる言葉の中、女生徒の一人が言う。「行かなきゃいけない気がする」六年生の頃に訪れたあの場所に「今」行かなきゃ行けない。

翌日、彼らは長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」へと出発した。彼らにとってじつに三年ぶりとなる無言館。そこで彼らは、画学生と今の自分たちとを照らし合わせ、「私」にとっての表現とは何かを問い、そして言葉にする。次々と溢れ出る言葉の先に、彼ら彼女らはなにを思うのだろう。画学生の絵は三年前と同じように、冷たい部屋の中にある。

当時十三歳だった生徒たちが出演した神奈川県立近代美術館が舞台の短編ドキュメンタリー映画『Museum Trip』（監督：森内康博／企画：稲庭彩和子・高松智行）〈World Media Festival 2011（ドイツ）受賞〉から二年。十三歳のあの頃、鎌倉の美術館で言葉を紡いだ彼らは十五歳となり、かつて鑑賞の授業で訪れた忘れがたい場所、戦没画学生慰霊美術館「無言館」で再会する。

彼らの「今」を記録するために『Museum Trip』を制作したチームが再び集結。十五歳の少年少女の「告白」がドキュメンタリー映画として完成した。

『青色の画布 ～十五歳、もうひとつの無言館』

2011 年／日本／カラー／50 分／HD/16:9
監督：森内康博
企画：髙松智行（横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校教諭）
制作：株式会社らくだスタジオ
協力：戦没画学生慰霊美術館 無言館　国立情報学研究所
　横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校
監督補佐：田村大
録音：藤口諒太
音楽：森内清敬
出演：附属鎌倉小学校二〇〇七年度六年一組有志
　窪島誠一郎（戦没画学生慰霊美術館「無言館」館主）

【自主上映会・教育活動・シンポジウム等での上映に関するお問い合わせ】
予告編：http://www.rakudastudio.com/aoironogafu（検索：青色の画布）
mail：info@rakudastudio.com
tel：080-5482-6548（株式会社らくだスタジオ）

自立に向かう子 ①

土づくり

閉塞感が高まる今日の社会状況においては、未来を担う子どもたちの教育への関心が高まり、学校だけでなく、地域社会においても「子どものため」を謳った教育プログラムが様々な形で展開されています。しかし、多くの場合は予め大人がレールを敷き、「効率」や「その場の楽しさ」を最優先したイベントであったり、人・もの・こととの出会いまでも準備し、子どもが「受け身」「待ち」の姿勢であってもある程度の「思い出」が保障できる体験活動であったりします。そして大人は決まって「今日は楽しかったですか?」と聞き、子どもたちは反射的に「はい!」と答える。大人は子どもの笑顔をみることで自らの教育の正当性を確認するとともに、未来に淡い希望を抱きます。しかし、ここにあるのは「子どものため」という耳障りのいい枕詞を置きながらも、子どもたちの消費感覚のみを増大させ、自立を阻害する「サービス」ではないでしょうか。サービスから得た一過性の思い出は、未来に「そんなこともあったな」という印象しか残さず、現実社会の中で生きていくための力とはなりません。私たち大人は「教育」を掲げる以上、子どもたちに実社会の中で自立的に思考し、行動する力を身につけることを主眼に置く必要があります。そのための大前提は、自立の芽を育むための「土づくり」です。栄養過多な土壌においては種子が発芽しないのと同様、サービス過多な環境においては、主体的に思考し、行動しようとする「自立の芽」は生まれません。

戦後の高度成長期に存在した「物質的豊かさ」という一つの社会的物差しを失い、個人の幸福を求める価値多様化社会は、いわば錯綜する情報に一喜一憂し、個性が過剰に煽られる「不安」の社会でもあります。したがって、大人は目の前の子どもに誰よりも幸福になってほしいと、子ども自身の世界から自らの世界に囲い込み、他人とは異なる特別なサービスが受けられるような「お膳立て」に力を注ぎがちです。そして、この栄養過多な土壌でノドの乾きを覚えなくなった子どもたちは、雑草のように雑多な環境において自ら水分や栄養分を探し出す本能を失ってしまいます。そして、生きていくための根源的な問いをもつ思春期ともなれば、「本当の自分とは?」「やりたいことがみつからない」と徐々に思考が内閉化するとともに、ケータイやネット等のバーチャルな世界に身を投じ、現実社会の中で主体的に生きていく術を失ってしまいます。これは、土づくりが不十分であるがゆえに、ある程度成長したところで枯れてしまう植物のようなものです。

イジメ、不登校、自殺等、大人がつくる環境下に生きる子どもたちが様々な問題を抱えている状況だからこそ、私たちは自らの不安を掻き消すための「サービス」を捨て、未来への先行投資となる「土づくり」から始める「覚悟」をもつことが必要です。子ども自らが思考し、葛藤しながら、自らの生き方を選択できる土壌をつくる。この雑多で不確実な環境の中でこそ、人・もの・こととの出会いを自らつくり、他者と共に可能性を実現していく子、つまり「自立に向かう子」が育まれるのだと考えます。(髙松智行)

予定調和を壊す。

「何か起こるといいな…」

子どもであれば誰もがもつ未来への思い。しかし、私たち大人がつくる世界が予定調和であればあるほど子どもたちは自ら考え、行動することを放棄します。

例えば、「生きること」と密接に関連するはずの宿泊プログラム。その多くの場合は、目標設定からスケジュール、交通手段の選択、食事内容、金銭管理、所持品の選択、人・もの・こととの出会い…まですべて大人がレールを敷き、子どもたちが創造的に活動することは許されません。その背景には、限られた時間の中でプログラムを効率よく進め、どの子にも思い出を残シテアゲタイという思いとともに、安全面の配慮こそが大人の責任であるとの考えがあります。しかし、「遊園地」のような制度化された遊びが子どもたちの未来に何をもたらすのでしょうか。

本プロジェクトでは、宿泊場所の選択以外は、すべて子どもたちの責任において進めることとし、思い出づくりを主眼に置いたイベントやプログラムは一切準備しないこととしました。つまり、宿泊に関するあらゆることを子どもたちの責任で行なうことは、大人として無責任であるとの考えよりも、子どもに責任を負わせないことの方が未来の社会に対して無責任であるとの考えを選択しました。大人は子どもにシテアゲルこと、子どもは大人にシテモラウことのアタリマエが生み出す予定調和の世界。この「アタリマエ」を壊すこと、そして自らの言動がすべて自分に返ってくる「原っぱ」のような環境の中でこそ、試行錯誤しながら仲間と共に可能性を実現していくのです。（髙松智行）

ヴィジョンを明確に。

「将来、何になりたいですか？」

大人であれば誰しもが子どもたちに尋ねたことがあるでしょう。子どもたちは「野球選手」「サッカー選手」「公務員」「デザイナー」…と次々と職業名を並べます。しかし、「どんな大人になりたいですか？」と尋ねれば、恐らく多くの子どもたちが悩んでしまうでしょう。同じように思えるこの二つの問いには大きな違いがあります。前者は一見、子どもたちの未来に多くの選択肢があるかのように思えますが、抽象的な職業を一つに限定させるという点で未来志向ではありません。そして、抽象的なその夢を叶えるための道筋は

曖昧であり、その職業に関連する経験しか受容しなくなります。一方後者は、どのように生きていきたいのかという一個人としてのヴィジョンを尋ねているのであり、その向こうには数多くの職業が存在し、未来に可能性を感じます。ヴィジョンを明確にすることをとおして今の自分に足りない経験やスキルをみつめ、さらにそれを補うための具体的な行動プランを立てることでゴールまでの道筋が具体的に見えてきます。そして、行動に移し、自らのイメージに近づくことにより自己変革を実感し、未来志向の子どもが育まれていくのです。

本プロジェクトでは、事前に企画書を作成した個々の子どもたちと問答を繰り返しながら、ヴィジョンとともに足りない経験やスキルの明確化を図り、行動プランを立てていきました。当初は「楽しそう」と漠然と参加を決めていた子どもたちも、問答の中で「なぜ参加するのか」「自分はどのように生きていきたいのか」「そのために今足りない経験やスキルは何なのか」「それを補うために上田で何をすべきか」ということを次第に整理していきます。

さらに、今回もっとも重視したのは、引率教員や上田市の人々等、自らのプロジェクトに巻き込む相手への意識です。物質的に恵まれ、やりたいことができる環境が保障され、何不自由なく育ってきた今日の子どもたちにとって、社会生活上決定的に欠けているのがこの「相手意識」です。多くの子どもたちの中には、大人は「シテクレテアタリマエ」という意識が長い年月を経て身体化されており、問答の中では最も多くの時間を費やしました。「なぜ夏休み中の先生たちが君たちの宿泊に巻き込まれないといけないのか」「君たちが行きたいという思いはいいが、果たして上田の人たちにとってどんなメリットがあるのか」等、厳しく問い直すこともあり、これによって思考が整理され、徐々に相手意識が高まっていきました。

例えばある児童は次のように思考を整理しています。

女子児童Mの場合

【Vision】
人と積極的に交流して自分の世界を広げていける人間

【Now】
初対面の人とは恥ずかしくて話せなくなってしまう

【Action plan】
上田の子どもたちと川で遊んだり、農家の方のお手伝いをして交流を深める

【Target】
・上田の人々
・引率の先生

【Value】
・上田の人々：鎌倉の人の目をとして上田のよさを再発見できる
・引率の先生：私が自分に必要なことと向き合い、克服するために努力している姿を見ることができる

【Goal image】
初対面の人でも積極的にコミュニケーションがとれるようになる

男子児童Sの場合

【Vision】
多い人の方へ流されず、自分の考えをもち、はっきりと言える人

【Now】
学校などの宿泊では食事、計画は全部先生がやってくれるから自分から考える機会が足りない

【Action plan】
活動計画や食事づくり、お金の使い方まで全部自分たちの事は自分たちでする

【Target】
・上田の人々
・先生

【Value】
・上田の人々：上田の良さの再発見
・先生：僕が流されない人に近づいていく姿をみてもらう

【Goal image】
自分の考えをもち、はっきりと言える人に近づいている

自由かつ責任を伴う旅であるが故に、自らの行動について選択を迫られる場面が多々あります。事前に思考を整理し、ヴィジョンを明確にしておくことは、その都度自らの行動を選択するための判断基準となります。そうした意味で、企画書の作成と一対一の問答は自立に向けた大切な土づくりと言えます。（髙松智行）

自立に向かう子 ②

ミマモル

私たち大人は、子どもの成長をじっくり待てなくなっています。ワンクリックで世界中の情報が一瞬のうちに手に入る今日の社会では、丁寧に土づくりをしたつもりでも、他者よりも早く結果を出さなければならないと常に「不安」が煽られます。そしてその不安から、子どもの自立に欠かせない「ほどよい距離」を保てなくなり、水分や栄養分を過剰に与えたり、掘り返した種子から無理矢理芽を引っぱりだそうとしたりします。しかし、いずれの行動も間違いなく子どもの自立の芽を摘んでしまうことになります。手をかけるべきは自立の芽を育むための土づくりです。それはまず、子どもたちの中にある「アタリマエ」を壊し、不確実な環境の中で適度にノドの乾きを覚える状態をつくること。そして、子どもたちが迷ったり、その場の気分に流されそうになったりした時は、個々の判断基準であるヴィジョンに立ち返り、問い直しをしながら自らの責任で未来を選択させることです。

私たち大人には、管理でもなく、放任でもなく、時間がかかっても決して焦らずに、「ほどよい距離」から子どもたちを「見守る覚悟」が求められています。（髙松智行）

1 生活必需品はもちろんお小遣いで購入。
2 調理室で夕食づくりをする様子。
3 経費節約！持参のハーブと特売品のチキンで夕飯の下ごしらえ。
4 本日の夕飯は野菜たっぷりタコスライス。
5 麻婆茄子とサラダ。栄養のバランスをしっかり考えたメニューです。
6 食事後の洗い物も自分たちの責任で。

“生きる前提”を省かない。

生きていくために大切なこととして、「食事を自分たちでつくって食べる」ことは基本です。かつて、子どもが大人の生活の一部を支えていた高度成長期以前の社会では、家事や家業の手伝いはごく当然のことでした。しかし、子どもの教育を学校が一手に引き受けるようになってからは、この「生きる前提」を子どもの世界から省略してきました。そして、生活を根底から支える家事に対して、大人に「シテモラエル」ものという「受け身」の姿勢をつくってきました。さらに今日では、家事だけでなく、勉強や遊びまでも大人がお膳立てをしている状況です。

「ウンコを出す大前提は？」との問いに「気張る！」と口を揃える子どもたちの姿は、正に「本当の自分とは？」「やりたいことがない」と悩む姿そのものです。そもそも自分の興味や関心は、外の世界と関わりながら「発見していくもの」であり、ウンコを出すためには、食材を手に入れ、調理し、食すことが大前提となります。したがって、この大前提を省略することは、生きることそのものの放棄ととらえることができます。

本プロジェクトでは、四日間で八食の食事づくりについて、食材の買い出しから金銭管理、調理、後片付けまで子どもたちの責任で行ないました。（髙松智行）

移動手段の選択から自分たちの責任で。

学校の教育活動で行なう遠足や林間学校、修学旅行の移動手段は貸し切りバスや特別列車が通例であり、選択の余地がありません。子どもたちは乗車さえすれば、何も考えなくとも目的地まで運んでもらえます。

本プロジェクトは現地での活動だけでなく、往復の移動についても子どもの主体的な思考や行動を大切にしたいと考え、グループごとに移動手段の計画を立てました。四つのグループは「活動費節約」「活動時間確保」等、それぞれの価値基準に基づいて移動手段を選択します。当日は、逆方向の電車に乗り込んだり、荷物を車内に置いたまま下車したり、乗り過ごして数時間待ちぼうけをしたり、大小様々なハプニングがありました。しかし、その都度自分たちで解決策をみつけ、行動に移すことができました。

無意識のうちに簡略化してしまう往復の移動ですが、子どもたちがこの宿泊への覚悟を固めていくためにも、自らの責任で移動手段を選択するということは必要不可欠です。（髙松智行）

金銭管理も自分たちの責任で。

Suica や PASUMO 等の電子マネーが普及している社会に生きる私たち大人は、「便利」「安心」という点において子どもたちにお金をもたせることを省略しがちです。しかし、お金の実態が見えないことから子どもたちの金銭感覚にズレが生じ、実際は消費感覚を増長させている実態もあるのではないでしょうか。

本プロジェクトは限られた予算の中で交通費や食材費、飲食費、入浴費等、四日間の生活に関わる全ての費用を自らの責任で管理しました。大金をもつ緊張感や、四日間、財布からお金が減っていくリアルな感覚、深夜まで続く会計作業は、子どもたちにとって貴重な経験になりました。

また、道中、財布を紛失した子もいましたが、グループの仲間と共に節約の知恵を出し合って、四日間の生活をやりくりするたくましさも身につけることができました。（髙松智行）

交通費や食材費の立替払いを清算する子どもたち。

“与えられた”楽しさ “獲得した”楽しさ

最近、「楽しさ」にも二種類あるかもしれないと考えています。「与えられた楽しさ」と「獲得した楽しさ」です。「受動的な楽しさ」と「能動的な楽しさ」と言い換えてもいいかもしれません。能動的な楽しさには、失敗したり間違えたりしても楽しさがついてきます。意欲を持って活動したことによって、失敗しようが成功しようが、何かを獲得するからです。

今回のプロジェクトでは、子どもたちは全員が目的意識を持って上田に行きました。「変わりたい」とか「試したい」とかそんな各自の目的を持っていたのです。普通の生活では当たり前かもしれませんが、学校ではやりたいことをやれる場面が極端に少ないと思っていました。だから自分もちょっとそんな宿泊を見てみたくなった。それが私の参加理由です。「自分たちでルートを決める」「自分達でお金の管理をする」「自分達でやることを決める」こんな内容に、フツーの大人はどう思うのでしょうか。私は子どもたちだけでできることはなるべくやらせたいのです。もしかしたら、「やりたいことをやれば責任が伴う」なんてことも感じてくれるかもしれません。何より、そんな宿泊って失敗したり間違えたりしても能動的な活動ですから「獲得する楽しさ」につながると思うのです。（鴫谷誉人）

このプロジェクトには、「考える必要性のない学校空間から抜け出し、自分たちで考え自分たちで行動する」というシンプルな願いを持って参加していた子どもたちがいました。一日三食の食事から自分たちで買い出しに行き、作り、そして食べる。金銭管理も自分たちで行い、グループ内の役割分担も決めて、先を見通しながら電車やバスの時刻も調査済み。宿泊の前に自分たちで集まって自分たちで話し合って自分たちでつくっていったのです。大人である私は、事前に子どもたちの問題点を焦点化したり、活動中に問い直しをしたりすれば、後はしっかりと見守ることだけで良かったのです。そんな彼らの四日間はとても充実しており、彼ら自身も手ごたえを感じていました。

しかし、「人と関わり自分の世界を広げていく」という課題を設定していた別のグループを見ていると、上田の人々との交流から新しい動きを考え出したり、新しい自分の考えを創り出したりしていたのです。そのような驚くべき姿を見て、本プロジェクトを更に発展させていくべきだと考えるようになりました。

前者のグループでは、子どもたちは自分事として活動を創っていくことができました。しかし後者のグループでは、人と関わることで、活動は更なる広がりを見せ、周りの人をも巻き込んでいったのです。両グループとも大人は見守る姿勢であったことに違いはなかったのですが、その見守る質に違いがあったのです。

私たちが生きている今日の社会は、激動の社会と言っていいでしょう。未来が予想しづらく、社会が次々と変動していくからです。現に経験豊かな大人の話を聞いたり、先進諸国の真似をしたりするだけではうまくいかなくなってきています。したがって、今私たちに求められるのは、紛れもなく「新しい世界を切り開く力」です。そのためには、一人ひとりが新しい方向へ進んでいくことで選択肢を増やしていくこと、作った選択肢を自ら選び取っていくことが大切になります。つまり、「良いと思ったら自分の未来を主体的にどんどん変えていく」生き方が必要になってきます。そう考えると、大人が先導役となり「今まで必要とされていた知識や技術をたくさん得ること」も大事ではありますが、それ以上に「みんな一緒でないと心細い」という感覚を捨て、自らの意思で行動しなければ、新しい世界を切り開くことはできません。大人は、子どもたちが自分で進んだり、その道が果たして良いものなのか確認し合ったりする場を用意し、子どもはその場を利用してどんどん自分たちの手で新しい行動を広げたり考えを出していくことが必要です。

このように考えると、活動の質を上げるためには「見守る」という行為を、「ファシリテート」と捉えることが必要です。

私は、このプロジェクトを、常に新しい形を模索する宿泊であると考えています。今後は、「自分たちの力で」という土台の上に、「未知なる世界を発見していくような」活動となるよう、私たち大人がファシリテートしていきたいと思います。

無思考のままサービスを享受しやすい今日の社会において「身体化された思考や行為」は、一度きりの宿泊学習で変わるものではありません。私たち大人でも「生き方をどんどん変えるのは難しい」「可能性を狭めてしまう思考や行為はもったいない」と感じるのですから無理はないことです。しかし一度でもこのような体験があると、いつかそれが生きる指針となる。大袈裟だけれど、プロジェクトを終えた今、そんな気がしています。（鴫谷誉人）

自立に向かう子 ③

萌芽

目の前に広がる予定調和を壊し、自立に向けた課題をみつめながら個々のヴィジョンを明確にした土づくり。引率者からは宿泊先と生活費の上限を伝えたのみで、当日の活動や所持品等の計画は全て子どもたちに一任しました。考える必要のない栄養過多の土壌から、考えざるを得ない乾燥した土壌に植え替えられた種子は、自ら水分や栄養分を求めて根を伸ばし始めます。

放課後や休日を利用して子どもたちは自主的に集まり、個々の特性に応じて役割を決め、集合時間と場所の決定から移動手段の選択、入浴施設の調査まで行ないます。さらに、上田市の秘書課や教育委員会、地元自治会の方に自ら連絡を取り、地元の人々との交流を依頼する子どもたちまで出てきました。自らの責任で上田の方々と連絡を取り、計画が具体的に進むことで、自分たちの宿泊に多くの人々を巻き込んでいるという実感が生まれてきます。

八月二三日。二〇名の小学校五、六年生の子どもたちが四つのグループに分かれ、上田市の塩田平を目指しました。引率者は先頭を歩くことなく、後方からついていくのみ。アクシデントとトラブル続きの四日間の幕開けです。（髙松智行）

上田電鉄に乗って、別所温泉へ。本日は男子オススメの「石湯」。一日の疲れがスッキリとれました。これから自治会館へ帰って夕飯です。

別所温泉の公衆浴場は21時半まで。お風呂にいく前に、夕飯の支度でできることはやっておきます。

電車内に大荷物を置き忘れ、東神奈川駅に取りにいく女子を見送る男子児童。八王子駅で再会を誓い合い、2時間後、無事合流できました。

アクシデントで芽生えた「仲間意識」。

全ての判断が自分自身に任せられた旅をするとき。特にその目的が寛ぎためのものではなく、様々な出会いや経験を求める貪欲な一人旅であるとき、得た偶然の出会いの感動と同時にやってくるのは、フル回転し続けた頭の疲労です。それは気持ちの良い、自分自身の成長を実感できる疲労です。今の子ども達は、危険を伴う可能性や、失敗から遠ざけられることで、頭をフル回転させ続けなければならない冒険のチャンスが、ほとんどありません。もちろん、小学生に一人旅はないでしょうが、大人の「安全の囲い」外で、子ども同士が「運命共同体」として支え合わざるを得ない、必死の状況がほしいのです。自分のやるべきことを必死に考え続けられるような、頭の、心の、「本気のスイッチ」が入る場、それが今回の四日間の旅なのです。

長野への長旅。乗り換えも多く複雑な経路を、五人の子どもたちが自力で進んでいきます。その途中で、さっそく予想外のハプニングが起こりました。電車を乗り違え、気がつき慌てて降りた時に、一人の児童が電車に荷物を置き忘れてしまったのです。子ども達は、次にどうすべきかを必死に考えます。荷物を失った六年生の児童と、もう一人の六年生が駅員室に向かいました。教員はその様子を少し離れたところから見守ります。二人は終着駅まで荷物を取りに行くことになりました。上田までの長い複雑な行程が、さらに長く複雑になり、児童は自分の失敗を仲間に詫びました。「誰だってあるよ。」「しょうがないよ。」「気にしなくていいよ。」仲間は、申し訳なさそうに状況を話す児童を励ます。このハプニングにより、子ども達は、先導する子にだけ頼りきって、いつもと変わらない思考停止状態で歩いていた自分に気が付きます。この時、初めて「自分で考える四日間」への真のスイッチが入ったのでしょう。彼らの目の鋭さ、輝きがはっきりと増したのがわかりました。

グループの中に一人、「自分に大切なこと、必要なことを判断し、積極的に仲間と関われる人間になりたい」というヴィジョンを持っていた児童がいました。彼女は、同世代の子に自分をさらけだすことに自信が持てず、旅に参加すること自体にも誰にも言えぬ不安を持っていました。しかし、先のハプニングの時、誰よりも積極的に行動し、仲間を支えたのは彼女でした。本人も、普段の自分とは確実に違ったと、後にふり返っています。予想外の緊急時に、無意識の中、自分が仲間のためにできることは何かを考え、重要な行動に移せたことは、彼女に自信を植えつけました。その結果、四日間通して「仲間のためには何を…」という、彼女の判断基準ができたのです。入浴設備は宿泊場所に無かったので、電車で別所温泉へ行って探します。初日に上田到着までに起きた様々な予定外の出来事で、夕食の支度や温泉へ行く時間も大幅に押してしまいました。そのため、温泉の営業終了間際の時間で、どこも入館を断られてしまいます。もちろん、教員は事前の入浴施設の手配はしていません。温泉の場所、営業時間、料金を把握しているのは子ども達です。子どもが焦り走れば、教員も後ろからそれに続き、交渉に向かえば成功を共に願いました。温泉に入れなければ、引率者も同様に入ることができません。子ども達はそれぞれ手分けして温泉に向

かい、交渉を続けました。遅れたのは自分たちの責任、なかなか交渉も叶わず全員が諦めかけたとき、最後の温泉で奇跡の出会いがありました。そこは、日帰り入浴が無い温泉だったのにもかかわらず、温泉の方のご厚意で特別に入れてもらえることになったのです。子ども達が受けた驚きと感動はとてつもなく大きく、入浴中も帰りの電車の中でも、話し合いは尽きません。「明日、あの人にお礼を持ってこよう。」「いや、それよりも鎌倉から手紙を書こう。」「いや、内緒だから逆に迷惑をかけるかも。」など、話す姿は真剣そのものでした。なかなか手が届かないものほど、手に入れときの感動は一入。それは、誰しもが多かれ少なかれ経験し、その時手を差し伸べてくれた人への感謝も、目の前の壁の大きさに比例していきます。「温泉へ行かなければ入れない」「行く温泉は自由」という条件下だったからこそ起きた、教員の予想や願いをも超えた学習となりました。

二日目の温泉では、一人の児童が洗い場で出会ったお客さんと話し、その人が絶賛していた風穴にみんなで行こうと提案しました。予定には無い行程でしたが、満場一致で風穴のある山に登ることになりました。行程は大変険しいものでしたが、旅も三日目、各自が自分の役割を判断し、互いの得手不得手を補い、行動できるようになっていました。提案者は、先を歩き「こっちだ！」と道を探って進みますが、時間内の到着が危うければ撤退もある条件付きの決行だったため、提案者としての責任は重く、皆の不安も感じていました。そのことにいち早く気づき、常に横を歩いて明るく支える者がいます。他にも、昼食用のおにぎりを忙しい朝に全員分作り、持って歩く者。途中で足を負傷しながらも心配させまいと懸命に頑張る者。またそれを支える者がいました。このグループにはリーダーも、保健係も、食事係もいませんでしたが、何の担当も決まっていない状態で、四日間各自ができることを探し、行動していったのです。初日に起こったアクシデントで仲間意識が芽生え、必死に生きる中で成長し、仲間の不足を補うことで、喜びが得られました。そして、各自が自分の存在意義と自信を手にしました。運命共同体の仲間のため、あらゆる場所で親切にしてくれた上田市の人達のためを思えた環境が、自信を持って考え判断できる子を育んでくれたのだと思います。

一日の終わりには、グループの反省と仲間から見た姿をそれぞれ話してもらいました。「自分のことも、他人のこともっと理解できるようになりたい」というヴィジョンで参加していた六年生の児童は、今回の旅の中では自分の気持ちを九割以上表に出すことが出来たと話しました。以前は、学校では四割、家では三割程度しか表に出せず、残りは全て自分の内に飲み込んでいたと言います。旅の最中、彼がグループのために声に出した意見は、小さな声だったけれど、とても的確な意見で、みんなを納得させ得るものだったと、他の仲間から絶賛を受けました。それまで内に秘め、自信が持てなかった自分の考えを、仲間に受け入れられ、誉められ、認められること、それが彼自身おそらく無意識に求めていたことであり、最も彼に自信を与えたものとなったのではないかと思います。

四日間を終え、五人はそれぞれ別々の大きなものを手にし、格段に成長を遂げました。しかしそれは、引率者がねらって与えた物ではなく、適度に乾燥した土壌の中で、予想すらしなかった偶然の出逢いから、子ども自らが水分や栄養分を獲得し、伸ばしていった芽なのです。（石黒奈央）

上田電鉄の車窓からの風景。毎日、別所温泉の行き帰りにはこの風景を見ていました。

ようやく辿り着いた「風穴」。この日は塩田散策も含めて 20 キロ以上歩きました。

別所温泉で知り合った方から話を聞いた「風穴」へ。延々と続く山道に疲労の色を隠せない子どもたち。

無言館、信濃デッサン館、槐多庵を訪ねて。

無言館にて戦没画学生・金子孝信さんの風景画から感じ取った「秋の気配」「風の流れ」「自然の力強さ」等を即興的に身体で表現する５年生児童。

今回の姉妹都市交流の架け橋となった戦没画学生慰霊美術館「無言館」。この美術館の訪問を熱望していた子どもたちがいます。一人は学校でアートを介した身体表現に取り組んできた子です。無言館では戦死した学生という作品の背景ではなく、作品そのものから感じ取ったことを即興的に表現していました。もう一人は、これまでの自分にはない個性的な絵を描くために上田行きを決めた子です。塩田散策で人々の優しさにふれることで生まれた塩田平への愛着を、描くモチベーションにしました。そして、自分以外の個性的な表現にふれたいと窪島誠一郎さんが館主を務める無言館や信濃デッサン館、槐多庵を訪問します。中でも夭折の画家・村山槐多の表現に大きな刺激を受け、その技法を自分の作品に取り入れながら塩田平の風景を描くことができました。

今ここに生きる人々だけでなく、過去に生きた画家との作品をとおした交流も塩田の地に愛着をもつひとつの方法です。（髙松智行）

姉妹都市交流

「人」をとおしてその土地に愛着をもつ

無言館との交流に加え、元来の上田市と鎌倉市の姉妹都市関係を「子どもレベル」で深化させたいという思いから上田市を訪問し、姉妹都市交流の計画を『青色の画布』信州上田上映実行委員会に提案したのは五月のことでした。その後、同実行委員会のご尽力と地元自治会の皆様のご理解により、短期間で地元の受け入れ環境が整いました。そして、八月二三日（金）～二六日（月）まで、附属鎌倉小学校の五、六年生の児童二〇名と教員五名が、次年度以降本格化を目指すための実験的試みとして、塩田の地で宿泊生活を行なうこととなりました。

宿泊生活の大きな目的の一つに地元の方々との交流を挙げていた鎌倉の子どもたちは、自分たちで上田市の秘書課や教育委員会をはじめ、上本郷自治会に直接連絡を入れます。そして、活動計画が具体化する中で、自分たちの試みに上田市の多くの方々を巻き込んでいる事実を実感していきます。

宿泊生活の四日間は、上田市の母袋創一市長や地元自治会の方々から歓迎を受けた式典に始まり、地元の子どもたちとの自然体験等、多くの方々と直接交流をする機会をもつことができました。

「はじめまして！」上本郷自治会館にて、地元の子どもたちに歓迎を受ける鎌倉の子どもたち。

実行委員会や上田市五加自治会、上本郷自治会の方々による歓迎式で、鎌倉の子どもたちに言葉を贈る上田市の母袋創一市長。

夕飯のみそ汁使用する湧き水を汲もうと宿泊場所から10キロ離れた山田神社へ。地図をもたずに地元の方々とコミュニケーションを図りながらの冒険です。

通りすがりの方に道をたずねる子どもたち。人から人へ、どんどん目的地に近づいていきます。

約10キロに及ぶ塩田散策の末、山田神社の湧き水を手に入れて喜ぶ子どもたち。

上田市の秘書課や教育委員会に相談をした男子児童のグループは、千曲川やその支流で自然体験を中心に取り組む「信州上田千曲川少年団」とのご縁が生まれ、地元の大人や子どもたちに手ほどきを受けながら川遊びを体験しました。海で育った鎌倉の子どもたちにとって、川でカワエビやオイカワ、ザリガニ、ドジョウを捕まえることは正に非日常体験であり、活動の様子から身も心も解放されていくのがよくわかりました。交流後、地元の中学生から手紙をもらった子どもたちは、近い将来再び塩田を訪問する気持ちを高めていました。

上本郷自治会に交流の申し出をした三グループは、上本郷自治会館で地元の方々や子どもたちから歓迎を受け、お茶を囲んで交流をした後、塩田散策に出かけました。最初はギクシャクした関係でしたが、公園の遊具で遊んだり、サッカーをしたりしているうちに徐々に打ち解けていきます。交流が深化したのは産川上流での川遊びでした。水浴びやカニ獲り等、特別な遊びではありませんでしたが、あっという間の二時間。鎌倉の子どもたちだけでなく地元の子どもたちも時間を忘れて夢中で遊んでいました。その後、地元でも名水と評判の湧き水がとれる山田神社に行くグループと別所温泉でお風呂に入るグループに分かれ、さらに交流を深化させていきました。

また、今回は個人で交流を深めた子どもたちもいました。夕飯の買い出しの時間、遠く離れた山田神社まで夕飯のみそ汁で使用する水を汲みに行くと地図ももたずに出かけた男子児童T。十キロの道中では多くの地元の方々と出会い、その都度道をたずね、コミュニケーションをとります。時に地元の新鮮な野菜や果物をいただきながら人から人へ、無事山田神社に辿り着きました。

自分の世界だけでなく、人と関わりながら自分の知らない世界を広げる人間になりたいというヴィジョンをもつ男子児童M。公衆浴場の洗い場で隣り合わせになった地元の方に自ら話しかけ、多くの情報を獲得します。話の中でもっとも印象に残った別所温泉奥地にある三島神社の「風穴」に行くことを仲間に提案し、グループで出かけることにします。翌日、紆余曲折を経てようやく辿り着いた風穴内は、真夏と思えないほどの極寒の世界でした。

四日間の宿泊生活を終えた子どもたちは、「上田の土地に大きな愛着をもつことができた」と口を揃えます。それは塩田の地に思いを馳せた時、交流をした多くの人の「顔」が見えるからに違いありません。（髙松智行）

芽生えた“相手意識”

やりたいと思えば何でもできる恵まれた環境で育つ子どもたちにとって、社会生活上特に大切になるのが「相手意識」です。

日頃の教育活動では、お世話になった人に感謝の気持ちを伝えようと挨拶をする場面が多々あります。しかし、教員が場を設け、教員の号令に続いて元気よく挨拶することは習慣づいているものの、意識レベルには個人差があります。本プロジェクトでは、四日間多くの方々との出会いがありましたが、見守ってさえいれば、その都度場を設け、一人ひとりが挨拶をしたり、感謝の気持ちを伝えたりしている場面がありました。

また、宿泊場所での過ごし方においても同様の姿が見られました。毎朝声を掛け合い、布団をきちんと畳んでから活動を始めたり、朝夕の食事後は調理室の掃除や片付けを個々が役割を見つけて取り組んだりしていました。さらに、「地元の方がいつ来ても、鎌倉の子どもたちに貸してよかったと思ってほしい」と毎晩就寝前に玄関の履物を揃える子や、最終日の大掃除でもお世話になった方々に感謝の気持ちを込めて取り組もうとリーダーシップをとる子が次々と出ました。これらはごく当たり前のようですが、日頃の学校生活や宿泊学習では見ることができなかった姿です。人との出会いを一から子どもたち自身がつくることで生まれた「多くの人を巻き込んでいるという責任感」が、常に相手を意識した行動につながったのだと思います。この相手意識は、身近な引率教員にも向けられました。毎日「先生、ご飯ができました」と部屋まで声を掛けにくる子どもたち。調理したものは見栄えの良いものから教員に配膳するという心遣いも自然と生まれていました。

四日間の生活でもっとも相手意識を問われた場面は、地元の子どもたちとの自然散策や川遊びをとおした交流です。交流を終え、帰路につこうとした時でした。鎌倉の子から、美味しい湧き水と塩田平の美しい景色を味わうことができる山田神社に行きたいという声が出ます。その声に鎌倉の子どもたちの中に先に進みたいという気分が増長し、上田の子どもたちは不安になります。この場面は四日

1 散策中、地元の子どもたちが不安にならないように常に側に寄り添い、コミュニケーションをとる鎌倉の子どもたち。
2 山田神社からの夕景。夕日に染まった塩田平の風景に言葉を失う上本郷自治会長と子どもたち。
3 玄関の履物をそろえてくれる子のおかげで、毎朝気持ちよくスタートが切れます。
4 自分たちが使用していない下駄箱であっても恩返しの気持ちで整理整頓。
5 最終日の早朝。最後の大掃除で床の雑巾がけをする子どもたち。

間で唯一目的意識を見失い、大人に判断を委ねようとする気持ちの弱さが生まれました。その状況を見兼ねた引率教員から個々のヴィジョンに立ち返る問い直しをします。それに対して「帰宅時間を遅らせることで交流した上田の人だけでなく、その家族にまで迷惑をかけてしまう」「迷惑をかけてまで行く価値があるのか？」と数名の子どもたちが疑問を投げかけます。その声が再び、このプロジェクトに巻き込んだ上田の人たちにとってのメリットを考え直すきっかけとなりました。前日に神社の名水と景色を味わっていた子が「鎌倉の子だけでなく上田の子にとっても上田のよさを再発見できるはず」と再提案し、納得した子どもたちが、山田神社に向けて再び散策を続ける選択をしました。

夕暮れ時の塩田平はすっかり秋の気配でした。日没前に山田神社に辿り着いた子どもたちは皆、十キロ以上の散策で乾ききったノドを湧き水で潤し、夕日で黄金色に染まった絶景に言葉を失っていました。（髙松智行）

参加した子どもたちの声より

参加を決めた理由は？

ゼロから自分で企画して、
行動できるようになるために参加を決めました。（K.S）

集団の中で自分の役割をみつけて、実行する力を
身につけるため。（M.T）

積極的に人と関わり、人の輪をどんどん
広げていけるような人になることを
目的に参加しました。（S.M）

自分の考えたことを人に伝わるように表現できる人になりたいから。（T.M）

無言館の作品で
踊ってみたかったから。（T.M）

僕は昔から人見知りで、上田の慣れない環境で
先生から言われずに自分から積極的に行動でき
る人になりたいと思い、この企画に参加しました。（Y.S）

自分のこと、
他人のことをもっと理解
できるようになりたい。（K.T）

本音で話せるというか、信頼、信用している人が一人しかいません。
このプロジェクトで相手の本音を受けとめたり、
思った事を口に出す力を身につけたかったから。（M.K）

人に頼りすぎないで、自分でやるべきことは
自分でやるため。（M.K）

いつも他の人に任せてしまっているから、
自分で企画し行動に移せる大人になりたい。（K.S）

他の人に流されない人間。自分独自の考えを
もつ人間になるため。（K.O）

自分よりも年上の人でも自分の意見を
きちんと伝える力をつけるため。（E.S）

他人に自分の意見を言えるようになりたいから。（A.T）

人に自分の意見をきちんと伝える力を
身につけようと思ったからです。（A.T）

大人に頼らないで、自分の意思で
動けるようになるため。（R.M）

まだまだ自分の考えだけで行動してしまうから、
人の意見を取り入れて、自分の世界を広げて
いけるようになりたいから。（K.M）

学校の宿泊はすべてを先生が準備してくれるから自分自身を試してみたかった。（Y.S）

一から自分で計画を立ててその計画を
実行する力を身につけるため。（R.T）

どんな力が身についたか

積極的に自分の役割を探したり意見を言う力。（K.T）

グループの人は見ず知らずの人ばかりでした。
でもこの４日間いっしょに生活することで
けっこうおたがいのことを知れたんじゃないかと思う。
ぼくにとってこれは大きなメリットだと思う。
だって、これから僕が成長していくためには仲間が必要だと思うからです。（K.M）

人と関わる力、いやな事にも背を向けず、やりとげる力。
日々をみつめ直す力を身につけたかったから。（M.O）

学校で自分の意見を
言えるようになった。（A.T）

積極的に行動する力。（Y.S）

まわりの人の意見に対して自分の意見を
はっきり言って流されない力。（K.O）

自分の食べるものは自分で作る力。（K.S）

面倒なことも前向きにやる力。トラブルをみんなで解決する力。（R.M）

自分から人に積極的に
話ができる力。（T.M）

知らない人に積極的に話しかける力。（S.Y）

６年生の姿に自分のなりたい姿がみえた。（E.S）（M.K）

自分で計画を立て実行する力。（R.T）

初めて会う人と
はずかしがらずに話せる力。（M.K）

どんなことがあっても仲間と最後までやりぬく力。（R.M）

人のために何かをする力。
人をたよりにする力。（H.K）

自分の意見を伝えることはちょっと苦手だったけど、
このプロジェクトでちょっと言えるようになりました。（R.T）

電車をのりまちがえてしまい、仲間が電車内に荷物を置き忘れたこと。
前なら、誰かがやってくれると思っていたけど、知らぬ間に駅員さんを
探して交渉していた。（R.M）

自分が指揮するのではなく、横から手伝う力。（M.K）

帰りの電車の中、上田に行ってなかったら
言えなかったであろう「一緒にのりを食べて」という言葉。みんなで食べたのりはおいしかった！＆楽しかった！（H.K）

身についたと思う具体的な場面は？

はじめて会う上田の人と交流した時。（T.M）

通勤中のピークで電車に乗れなかったり、
いろいろなことが予定どおりにいかなかったこと。（S.Y）

４日間、毎日のお昼ご飯のおにぎりを
私がにぎってたこと。
だんだん人のために何かをすることが
楽しくなってきた。（H.K）

ぼくたちは４時間おくれで上田につきました。
なぜかというと反対方向の電車に乗ったり、
電車内に荷物を置き忘れたりしたからです。
でも、自分たちで必死になって解決できたから
それはいい思い出です。（K.S）

温泉の営業時間が終わっても諦めずに交渉した時。（R.M）

温泉で会ったオジさんから風穴の話を聞いて、
グループに提案して、行くことになったとき。（K.S）

食事づくりの時、必要な役割を
自分から探してできた。（K.T）

川でつかまえた魚を持ち帰るかどうかを迷った時、
「行きの電車内で人に迷惑をかけた経験」を思い出して
自分たちで持ち帰らない判断が出来た時。（K.O）

まったく知らない町、上田で人に道を聞いたり、３日目に上田の子どもたちと
川遊びをしたりした時、自分から話しかける事ができたとき。（M.O）

最終日、４日間お世話になった上田の人に
感謝の気持ちを伝えるため、
そうじに自分から動けた。（E.S）

山田神社に行くか行かないか迷った時、上田の人たちの
メリットを考え直す事ができたこと。（S.M）

６年生の姿を見ながら、
いつか自分の力をはっきするために学んでいた。（M.K）

最初は険悪な感じだったけど、私が
電車にバッグを忘れた時にみんなが
協力してくれたからその後はずっと
思ってることを言えたし、グループ
の人を頼りにできた。（H.K）

巻き込まれた人たちのメリットは？

小淵沢から上田に行く途中で出会った家族が一緒に遊んでくれた。楽しかった。楽しませてもらったのに「ありがとう」と言ってくれた。こんな「ありがとう」という言葉はそう簡単には出ないと思う。（S.M）

元担任の先生に４年生の頃からの成長を見てもらえたこと。先生にも「リーダーシップをとってみんなをよくまとめていたね」と最後にほめてもらえました。（M.O）

積極的に人とかかわる私の姿を先生にみてもらえた。（T.M）

上田の良い所（山田神社の水や風景）を教えることができし、しっかりコミュニケーションもとれた。（T.M）

川遊びの時、千曲川少年団の人達も仲間も先生も笑顔でした。（R.T）

相手を思って一生けん命やったけど、自信がない。（K.T）

いっしょに探検をして、上田の人も知らない場所を知ることができた。（K.M）

山田神社に行っておいしい水を飲んだとき、上田の人たちが「おいしい」「こんな場所知らなかった」と言っていた。僕たちと探検することで上田のよさを発見でしたと思う。

上田から帰ってきて、ふつうの自分にもどったと思っていますが、父と母は「変わったなぁー」と言います。自分の世界が一つ広がったという事かもしれません。（K.M）

上田の人達に上田のいいところを本音で伝えることができた。（M.K）

先生達のメリットは、やっぱりぼくたちの成長を間近で見られたことだと思います。先生には聞いていないけど、電車の中で「みんながどんなふうに成長したのかを話し合った時、みんな私もそう思う。ここがよくなったよ。」と言っていたからです。(K.M)

僕の発言、一言一言によって、こんなにも沢山の人達が動いて下さり、川遊びを成功させてくれました。（R.T）

私がものをはっきりと言うことで、みんなも思ってることをどんどん言えるようになったと思う。（H.K）

学校の宿泊学習でも自分で料理をしたい。弁当は良くない！（T.M）

自分で企画して行動することは楽しかったけれど、毎日買い物や食事の準備をしなければいけなかったので親のありがたさが実感できました。（K.S）

ふだんの学校では先生が悪いのではなく、自分たちが行動しないだけ。（T.M）

４日間の生活からみえてきた日常生活

まず感謝の気持ちです。正直４日間楽しかったけど苦しかったです。こういう生活を大人は何十年も続けているのだから驚きと感謝です。それとともに疑問と違和感がわいてきました。それは子どもだけ楽をして大人だけ大変な思いをするのはおかしいということです。（K.M）

学校はやることがはじめから決まりすぎている。（K.S）

「絵を描くこと」と「旅をすること」は同じだ。（H.T）

たくさん歩いたあとの山田神社の水は普通の水よりもすごーくおいしかったです。（M.K）

人の話を聞く、落とし物をしないというあたりまえのことができて初めて人に信用されることがわかりました。いつも言われている自分の課題を”肝”から感じた４日間でした。（M.T）

最後の夜に自治会館の前で会った神様っぽいおじさんから「家族を大切にしないから人はお金のどれいになるんだ」という話を聞いてはっと思いました。（K.M）

学校はいつもしばられている様でもっと解放感のある環境にしてほしい。自分達の考えで行動できる時間がほしい。（K.O）

僕らが成長していく中で仲間が必要だということ。（K.M）

今後の展望は？

自分の考えに反対する人がいても、強い気持ちをもって納得してもらえるような言い方をしていきたい。（K.O）

何か言ってもやらない事があったから有言不実行、不言不実行から有言実行、最低でも不言実行にしていく。（K.T）

もっと人と積極的にコミュニケーションをとれるようにしたい。（K.S）

自分たちで一から計画を立てて、自分たちで野宿のような生活をしたい。（T.M）

鎌倉市長にプロジェクトの成果をプレゼンにいく。（K.M)(H.T）

こういうプロジェクトを何回も経験していくこと。そうすればだんだん自分のゴールイメージに近づいて行くと思います。これは毎日歯をみがくことと同じだと思います。(K.M)

絵じゃなく町のイメージでもいいからそこの町で踊ってみたい！（T.M）

上田では「自立」というより、「グループ活動」「人」が中心になった。でも、それらが自分自身の自立に向かうんだと思う。（H.K）

自分たちだけで宿泊生活をやってみる！（M.K）（A.T）

上田で身につけたリーダーシップを日頃の学校生活でいかしていきたい。（M.O）

冬にお母さんを連れて上田に行く。（H.T）

ご協力いただいた上田市のみなさま、

人をよろこばせる？
人の気持ちをよむ？
人をほめる？
人とわかちあうは？

人に注意する？
ことばであらわすもちがう

人となっとくしあう？
ホントウのことを言わない？
あの人のためにそばにいく？
ズバズバ ホントウのことを言う？
なぐさめる？
その人の気持ちになる？
人の話をよくきく？
苦しい時 そばにいたげる？
なかよくする？

人のかたをたたいてあげる？
ものをかったげる ×
ゆうことをきく ×△
本音ではなしあう
ノート・えんぴつ・消しゴム　ものをかしてあげる△
苦しい時　声をかけてあげる？
くすりをのむ？　ヘルニア？　おうえんする？

てつだいをする？
気持ちをひっぱりだす
どうか あの人を助けてと お祈りする？
かなしい時 いっしょにかなしむ
心のおちつく本をあげる？
ケガした時 バンソーコーをあげる？

人の気持ちになって人が笑顔になるようにする
人によびかけをする
言われたことをすぐする？
ほめてあげる　そして行動する
かわりにやってあげる

本当にありがとうございました。

神におねがいする
すぐ行動してあげる
コーヒーを作ってあげる？
わらわせる？
成長のため苦しめる？
こころをいやす
ぞうきんがけで人を笑顔にする
ゆかをピッカピカにして気持ちをいやす
相手と同じ思いをしたことがあると言ってあげる？
骨折した時 調べてこうするといいよと教える
気が休む所につれてってあげる

怒ってあげる
たとえば　かってにおかしをたべた時
ダメ なんでおかしをたべてるの！と怒る？
プレゼント　たとえば人がおちこんでいる時

こころの文字をはなしてあげる？
忘れた物を買ってあげる△
夢をあたえる
でも なんか職業ないな～

何かやってみたらという
人の気持ちになってうなずいてあげる

ぼくが考える本当のやさしさとは
「人の気持ちになって 人が笑顔になるようにすること」
「無私になるということ」

上田の人たちにはそんなやさしさがあった

『やさしさ』H.T（小学５年生）

私は「積極的に人と関わり、人との輪をどんどん広げていけるような人になる」ということを目的に『鎌倉市・上田市 姉妹都市交流プロジェクト』に参加しました。

普段の宿泊学習では、先生方にバスや朝昼晩のご飯、行く場所、時間など、諸々のことをやってもらい、私たち子どもはその計画にしたがって行動しているだけのものでした。けれど、今回のプロジェクトは、子どもが電車、買い物、ご飯、時間、お風呂の計画を立て、上田の子どもたちと遊ぶ人は自分で連絡をしたり、先生はそのグループについてまわるだけで、ご飯を食べる時も子どもが料理を作ってテーブルに並べたら、先生に「ご飯が出来ました」と言って呼びにいくような状況で、それほどまでに子ども中心の宿泊学習でした。

私のグループは上田の子どもたちと交流し、一緒に川まで行ってカニ探しをしました。自己紹介から始まり、最初は話もぎこちない感じでしたが、途中の公園ですべり台をして遊んだり、お菓子の交かんをしたりするうちにきん張もなくなり、カニ探しが終わる頃には「上田の子ども」と「鎌倉の子ども」という雰囲気はなくなっていました。その後は、別所温泉に行ってお風呂に入るグループと名水の山田神社に行くグループにわかれて交流を深めていきました。私は山田神社に行くグループでしたが、そこで、R 君が家に帰るのが遅くなってしまうから行くのか行かないのかという問題で「R 君が帰るのが遅くなり、家族に迷惑をかけてまで行く意味があるの？」という意見が出ました。そのことでもう一度 R 君のメリットを考え直し、「上田の良さを再発見できる」という意見でみんなが納得し、山田神社に向けて出発しました。

山田神社までは畑をしている方や通りすがりの方とコミュニケーションをとりながら約 10 キロの道を歩いて、ようやくたどり着いた頃には、ちょうど夕日で光った塩田平を見ることが出来ました。のどが乾いていたのもあって、水がすごく美味しくて 500ml のペットボトルで２本も持ち帰ってしまいました。私は、一人ひとりが考えを出し合って納得した上で山田神社に向かい、そこで優しい方々と出会い、きれいな景色と美味しい水と出合うことが出来て感動しました。帰る途中に草刈りをしていたおばあさんがいたので声をかけると「あら、どこから来たの？」と言われて色々な話をしてくれました。このプロジェクトの中では、自分から積極的に人と関わったことで人の輪を少し広げることが出来たと思える時間でした。

次の日はもう出発の日。長いと思っていた４日間でお世話になった方々や協力して下さった方々にお礼と感謝の気持ちを伝え、「次上田に来る時も使わせていただけるように」とみんなで役割を決めて、担当場所を来た時以上にきれにしようと心がけてそうじをしました。

私は、このプロジェクトを通して普段の生活ではあたり前のように言っている「ありがとう」という言葉の意味のようなものを実感することが出来ました。そして、自分に足りなかった積極性を身につけることができ、いつでも笑って話してくれる温かい人達に出会えて、この４日間は感動してばかりでした。

私はそんな温かな上田が大好きです。　　S.M（小学６年生）

自立に向かう子 ④

余韻

今回のプロジェクトでは、私の受け持つクラスから四名の児童が参加した。

上田での彼らの生活は、それぞれが自分の考えを持ち、行動する姿が見られた。高い意識の中でそれぞれの課題をクリアしていたように思う。しかし、むしろ大切にしなければならないのは、学校や家に戻ったとき、学んだことをどう生かし、還元していくかだと考えていた。

私のクラスの参加者は「自助」と「共助」の一方に優れ、もう一方を課題とする児童がいた。抜群の能力を持ちながらも、その力を集団の中で生かすことができず葛藤する子。仲間とのバランスをとろうとしてしまい、自分の力をあえて押さえているように見える子。

昔は、という言い方は好ましくないのだが、大家族の兄弟間の争いも放課後における集団遊びもあった頃に比べれば当然、「自助」と「共助」のバランスは取りにくい世の中になっているのではないか。

夏休みを終え、学校生活が再びスタートした。「自助」や「共助」とはいっても、そういう力は目に見えるもの、点数等で数値化できるものではない。しかし、明確な変化が見られた場面あった。

上田を経験した児童の一人がグループ活動の際、協力しようとしない子とそれ以外の子とのトラブルを必死に解決しようとしていた出来事あった。

「みんな、仲間がグループから離れたまま活動続けたら、グループ活動の意味がないよ。解決策は具体的には無いけど・・・とにかくこのままじゃだめだ よ。」

私は、正直驚いた。上田を経験する前は、どちらかと言えば、そういう「共助」が得意ではない子だったのだ。それがだ。どちらが「正しい」「正しくない」のレベルでなく、互いのプライドを傷つけないように、自分の力を目一杯つかってグループを調整しようとしていた。

グループの中で自分の役割をしっかり果たせば、それ自体で心が満足すること、また、それを仲間が認めてくれれば、自分の居場所を確保した安心感を味わえること。それを経験したからかもしれない。

物事を経験すると、人は考え、変化しようとする。何かに触れようとしなければ、自分の価値観は変わらず、「自助」「共助」のバランスをとることができない。

上田に参加した四人は、変わったのではく、変われた、変わろうとしたのではないだろうか。考え、変化しようとする。何かに触れようとしなければ、自分の価値観は変わらず、「自助」「共助」のバランスをとることができない。上田に参加した四人は、変わったのではく、変われた、変わろうとしたのではないだろうか。

「よいきっかけを与えて貰えたな。」

最近の学級での様子を見ていると、ふとそう思うことがある。もちろん、上田に行かなくても自分を変えられる場面は日常の中でたくさんあるだろう。だからこそ、このプロジェクトを経験した四人が、先頭に立ち、クラスの核になり、経験を広めて行って欲しい。そうなって初めて、「上田での生活がよい経験だった」とみんなで振り返られるだろう。（古閑賢二）

今回の「鎌倉市・上田市　姉妹都市交流プロジェクト」には、昨年度担任をした児童が何人もいた。行く前に見た「企画書」からは、それぞれの児童が自分を見つめ直し、自分の課題の核心に触れた記述がいくつも見られた。それは担任をしていた時に私自身も感じていたことであり、まず「自分自信を分析できている」ことに驚かされた。

「相手意識がなかなか持てず、自分の言動を優先させてしまう子」「自分の考えはあっても、それを周囲に伝えるのが上手ではない子」「自分の考えが弱く、つい友だちに流されてしまう子」・・・それぞれどの児童も、昨年度の教室では何度となくそんな姿が見られ、「さてどうしたらいいものか」と私自身が悩み、葛藤した一年間でもあった。

そんな様子は、夏休み前の七月にも見られた。「書いてある企画書を棒読みするだけ」「プレゼンをしにやってこない」・・・なかなかその子たちの必死さが伝わってこない。「この先、どうなるんだろう。」と思ったものだ。でもそんな気持ちは上田に向かう道中や上田に着いてからの生活、上田での活動の中でゆっくりゆっくりとなくなっていくことが分かった。

一人ひとりが上田での生活に対して「自分事」としてとらえていたからこそ、いちいち考え、イチイチ行為していた。そこには単なる思いつきや目先の楽しさ目当ての短絡的な言動がない。普段の学校生活では省略されてしまっていることが、この上田での四日間では保証されていたのだ。だからこそ、イチイチ考え、行為することが積み重ねられ、ありふれた言い方だが「日に日にたくましくなっていく」のが分かった。考えることを止めない上田での四日間。

お風呂上がりの電車内で言い合う男の子二人。論点は「相手意識」だった。行き先を見直し、立ち止まる女の子たち。友だちに流されるどころか一歩も引かない。そんな姿を見ていると、「ああ、上田に来てよかったな。」と思った。

九月、二学期開始。廊下で上田に行った元四年一組の女の子に会った。

「○○○○、上田で成長したよな。」と話しかけると、「何それ～。」と照れ笑いしていた。最高の笑顔だった。これからの学校生活で、あの子たちはどう考え、どう行為していくのだろう。今後もあの子たちからは目が離せない。

（小澤　遼）

『鎌倉市・上田市姉妹都市交流プロジェクト』に関わる全ての方に御礼申し上げます。

息子から「上田市に行きたい！先生は命は保証するけれど、それ以外の事は全部自分たちで計画してやるんだ。電車も自分たちで調べて乗るし、ご飯だって作るんだよ。」と言われた時の目の輝きはこちらもワクワクしてしまうほどのものでした。その日から夕飯の準備を手伝ってくれたり、家の事も積極的に手伝うようになりました。パソコンで行き方を調べたり、グループの子達と待ち合わせをして色々な計画をしていたようです。

大きめのリュック一つだけの荷物でしたが、そのまま送り出しました。地元の方達との川遊び、夕飯作り、野菜がとっても美味しかった事など、良い経験をさせていただいたんだろなと思えました。ゴーヤの唐揚げは本当に美味しかったようで、次の日にお土産でいただいたゴーヤで作ってくれました。本当に美味しくて感動しました。「自分達でやりたい！気持ち」がこんなに強いんだなとこの経験を通して私は学びました。（保護者Ｓ）

まずは、子どもたちをひたすらに見守り続けてくださった、周囲の全ての大人の皆様に深く感謝しております。今回親として、『見守ることの難しさ』を感じたと同時に、『実は子どもって出来るんだ！』という嬉しい発見もありました。

長男、次男合わせてこれまで８年間鎌小にお世話になり、自分で考えること、自ら生み出すことを日々経験させて頂いてきたつもりでした。しかし今回の上田行きは、私にとっても、「子どもの自主性とは？」と改めて考える機会になったと思います。

実は、今までの自主性は結局、与えられた枠組の中での自由に過ぎなかったのかもしれません。自分は一体何をしたいのか、それは他者にとってどんな意味を持つのか、と根っこの部分を本気で考える作業を、息子は人生で初めて経験しました。私たち親も、そんな子どもの本気を見守り、我慢して待つ、という貴重な時間を頂きました。出来ることなら、更にこの先が見たいなと秘かに願っています！ありがとうございました！（保護者Ｍ）

保護者の声より

♪トコトン、トコトン、トコトン♪トコトン♪トコトン…♪」。お囃子のリズムで、とことんやってくることを条件にプロジェクトに参加した三人兄妹の末娘。楽しい事ばかりではないと高松先生からしっかりと洗礼を受けた事前準備では、娘なりにイメージをしっかり膨らませているのがとてもよく分かった。

出発間近、好奇心で心が躍る娘。末っ子の甘ったれ娘だが、人の観察と状況判断は兄妹の中では抜きに出る。しかし、考えた事を実行に移す力が今ひとつだったので、どんな体験をして帰って来るのかとても楽しみな私でした。出発前日まで、あらゆる自分の準備不足を半泣き状態で噛みしめた。落とし穴が至る所にあった。でも、親は何も言ってはいけない。日頃の苦手な事が浮かび上がり見ているとかなり面白い。一方で、自分の子育てが浮き彫りになり、笑えない…。（恥）恵まれた環境と仲間、そして日常にはない多くの時間が子どもに知恵と勇気を与えると信じ、心配など何ひとつなかった。全ては、『自分ヲ知ルコト』から始まる旅なのだから。

このプロジェクトに関わる全ての方々へ、この場をお借りして心より感謝申し上げます。（保護者Ｋ）

「これからの人生」

今あなたは、船の艤装の仕方、基本的なセーリング技術をマスターしようとしている。艤装がしっかり出来てなければ、船は走らないし命とりになる。基本をマスターしてなければ応用も出来ない。１人海に出たら自分で判断し決める。海原には道路も線路もない。コースを引くのも時間を見るのも天候をみるのも自分。逃げられないけどそれが楽しい。仲間と海に出たら、話し合い、信用して、分担作業。これらは経験しなければわからない。そして経験したことのある仲間とは自然とわかりあえる。自分を認めてくれて、わかりあえる仲間がどれだけいるかが重要だと思う。

私たち親に出来るのは、大海原に送り出してあげるだけ。先輩経験者としてアドバイスや応援、栄養満点弁当を作ってあげるだけ。惑わすもとになる発言や行動は慎みたいと日々反省。部屋に籠って妄想していても身に付かない大切なこと。それは自然との共存、人との関わり方。大海原で揉まれて仲間と共に強くなっていってほしいと思う。（保護者 Ｓ）

鎌倉市・上田市姉妹都市交流プロジェクトに参加させていただくにあたり、お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

どちらかというと自分の気持をうまく表現できるタイプではないと思っていた息子が、「上田にどうしても行きたい！」と強い口調で熱く訴えた時は、内心驚きました。ただ楽しいだけの旅ではない。企画書作成から始まり、自分を見つめ仲間と意見戦わせながらも共に協力し合い旅をつくりあげていく…。そんなことをやり遂げることができるのだろうか？正直心配でした。失敗もたくさんあったけれど、充実感に満ちた息子の顔を見た時、送り出して良かった！と心から思いました。自分の力を試したい、もっと出来るんだ！という自信。まわりの協力あって自分があるという事。話しかける勇気！新しい事に挑戦。…プロジェクトを通し「自立」に目覚めひとまわり成長したように感じました。ついつい先回りして手を出してしまっていた事を反省しました。貴重な体験をさせて頂く機会を頂き本当にありがとうございました。（保護者 Ｓ）

私はよく子供に、「あなたが大人になった時、お母さんに背後霊のようについて回ってもらいたくないのなら、自分の事は自分でしなさい。」と言います。引き出しが開けっ放しだったり、靴が脱ぎ捨てられていたりなど小さな事ですが、やり残した事は結局、他人の世話になってしまいます。だから、私は『自立』とは自分の事を完結できてまずは基本があって、初めて出来るのだと思います。ところが母は甘いもので、やり残しを代わりにやってしまう事が多いものです。代わりにやってやらないと、家事が進まないというのが現実でしょうか。

今回のプロジェクトで、子供が最初から最後まで責任を持って行ったことは『自立への一歩』だと思います。普段はできない貴重な体験でした。ついでに、いつもは自分が最後までやっていない事に気がついて、母に、他人に、感謝してもらえると…嬉しいのですが。（保護者 Ｔ）

この度、息子の強い希望により、『鎌倉市・上田市姉妹都市交流プロジェクト』に参加させて頂きました。計画段階から時刻表を調べてグループ内で情報を共有したりして、子供たちでスケジュールを立てていたようです。普段は自ら計画を立てることは少なく、良い機会だったと思います。また、交通手段も普通列車で何回も乗り継いで行くため、当日はハプニング等もあり、計画通りにいかず、その都度、グループのメンバーで解決していったようです。また、上田市では川遊びなど、自然体験も行い、首都圏の生活との差異も自ずと学び、視野が広くなったように感じます。グループでの自炊も分担し頑張ったようで、普段は親が提供する受け身の環境と異なり、能動的に実行し成し遂げた達成感や協調性の大切さも学びとれたのではないかと思います。

本プロジェクトは、「自ら学び自ら行動する」ことに対する素晴らしい教育の場であると感じました。（保護者 S）

鎌倉市、上田市姉妹都市交流プロジェクト、お世話になりました。実はこの夏休み、友人家族が住む沖縄にひとりで行く。旅行代も自分で捻出する！と決めていたのですが、夏休みに入る前、高松先生からこのプロジェクトを聞き小学校最後の高松先生企画のプロジェクトに「絶対に参加したい！」と本人、張り切っての参加でした。行き先が変わったものの公言通り参加費も自分で捻出しての参加に正直驚いています。旅行が好きなわたしたちは、娘が小さい頃から「かわいい子には旅をさせよ。」のことわざを実践して来ました。広い世界で生きて行くことが決まっているのであれば早いうちから広い世界を実感して体験して欲しい。面白いもので、近所の友人宅に一泊しただけで大きく成長して帰宅する娘の姿を見るたびこのことわざを実感しました。鎌倉小を選んだのも、このことわざが関係していると言っても良いかもしれません。今回は出発当日、帰宅時ともに私が日本にいなかったためこのプロジェクト参加後の本人の変化の様子を伺い知る事が出来ませんでしたが、ひとつ言えることは自ら率先して動く様になったことでしょう か。

「かわいい子には留守番をさせよ。」

ひと月半、家を留守にした娘の成長ぶりに新しくことわざに加えたいひとことです。（保護者 M）

子供が自分で “絶対に行く” と決めた『鎌倉・上田 姉妹都市交流体験プロジェクト』。正直、準備の段階から、帰ってくるまで心配で子供のことばかり考えていましたが、今は行かせて良かったと思っています。

日々の生活を振りかえると、子供が考えて行動する前に、親が手や口をだしてしまったり、「先生の言うことをちゃんと聴きなさいよ」「まわりの人に迷惑をかけないでね」などなど、ついつい口うるさく言ってしまい、親の小さな器の中に閉じ込めてしまっているように思います。しかし今回のプロジェクトでは、自分で行く目的を決め、達成する為にはどうすべきかを考え、そして行程も食事のこともすべて仲間達と話し合って決め、助け合いながら行動する。何かあった時は自分達で解決する。先生方は口を出さないで、いつも見守ってくれている。そんな体験ができたなんてすごい！プロジェクトを考え企画し、支えて下さった先生方や上田の方々に感謝しています。子供が上田から帰ってきて、真っ先にしたことは、お味噌汁づくりでした。家族に「いつもありがとう」と言いたかったようです。親自身が子供が転ぶことをこわがらないで、たくさん体験させることが子供の自立につながると感じました。（保護者 M）

「今みたいな態度のあなたを上田へは行かせられない。」「僕の夢なんだ、絶対に行く。」

出発の日までに息子と何度言い合ったことでしょうか。息子は典型的な一人っ子。小さい時から気は弱いのに自分の胸にやりたい事が山ほどある熱い気持ちを持った、アンバランスな子でした。「個」としての熱さは微笑ましくても、「集団」の中では熱さが空回りし、トラブルの原因となったりと、息子もどうしていいのかわからず、自信を失くしていたように思います。親も言葉で伝えても、伝えきれていない事をもどかしく感じていました。

上田での生活の後、徐々に周りと合わせたり、人の意見を聞けるようになってきました。何より自分で自信を失くしていたのが、結構しっかり行動できるようになったのは大きな収穫でした。上田では想像通り、数々の失敗をしたようですが、その中で自分なりに色々と学んできてくれたのだと 思 い ま す。

この度は色々とご迷惑をお掛けしたかと思いますが、思い切って行かせてよかった、と思っております。ありがとうございました。（保護者 T）

鎌倉・上田市交流プロジェクトに参加させていただきましてありがとうございました。

実は、5 年生になってから、子ども自身に様々な迷いが生まれ、それを自身でもどうして良いか解らずにいるようでした。おそらく学校でもですが、家では完全にフリーズ状態、何を言っても聞かず、私も怒鳴りっぱなしの日々が続いていました。私自身も我が子にどうあってほしいのか、あらためて問い直す毎日でした。彼にしか出来ない事を見つけてほしい。でも学校生活も習い事もきちんとしてほしい。相反する要求もしていたのかもしれません。そんな時にこの上田行きがありました。

帰ってきた時の「ただいま！」という声・目の輝きに、一生懸命上田での事を話す様子に、ああ、何かつかんできたな、少し前に進んだな、という感じがしました。子ども自身が自分の力に自信をつける、素晴らしい機会だったと思います。今後も是非参加させていただきたいです。（保護者 T）

上田市と鎌倉市の交流の架け橋となり、生徒達を見守り、支えて下さった関係者の皆さま、この度は大変お世話になりました。

自分達で考え、企画し、活動する。その活動に責任を持つ。そんな当たり前のことが出来ない、する機会を与えられない社会になっているという現実を思い知り、一人の父親として非常に残念であり、反省の思いを抱く良い機会になりました。

私達、親自身が子供達の喜ぶ様子を見たい一心でそのような環境を歓迎し、思い出作りに浸っている面が多々あったのだと思います。親まかせ、先生まかせの現状から脱却し、省みる良いプロジェクトだと思います。是非とも、本プロジェクトを継続していただき、自分の考えで動ける太くたくましい子供達が育ってくれることを切に願っています。合わせて、家庭における親の役割も重要であり、大いに改める必要性を感じました。学校と家庭、そして地域社会が協力して子供達に自立を促し、見守る環境を作れると良いと思います。（保護者 T）

本プロジェクトは、私たち大人が未来の社会に責任をもつことを前提とし、
家庭・地域社会・学校が共に子どもたちを自立に向けて教育する「覚悟」を問い直すものです。

消費社会の中で衰退しつつある家庭や地域社会の教育力の補完が急務となっている今、
私たちは勇気を出して立ち止まり、家庭・地域社会・学校の分断した関係性を新しいカタチで
再構築する多様な試みが求められています。

鎌倉市・上田市　姉妹都市交流プロジェクト

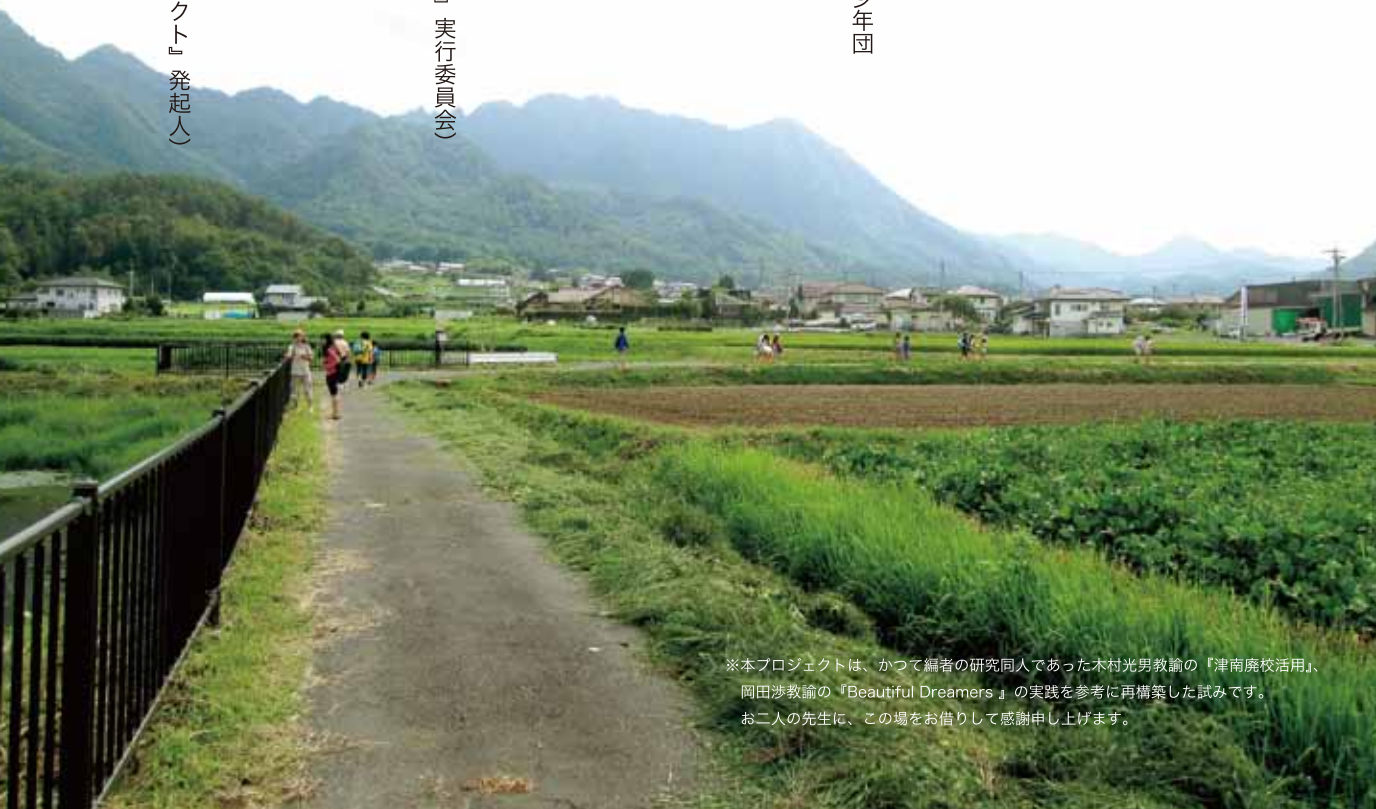
■主催：『青色の画布』信州上田上映実行委員会
■主管：『鎌倉市・上田市 姉妹都市交流プロジェクト』実行委員会
■共催：横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校
■後援：鎌倉市
■助成：長野県『地域発元気づくり支援金』対象事業
■協力：上田市（秘書課・商工課）上田市教育委員会（学校教育課　生涯学習課　塩田公民館）
五加自治会　上本郷自治会　戦没画学生慰霊美術館 無言館　上田映劇　信州上田千曲川少年団
竹内製綿　塩田の里交流館　長野大学・古田睦美研究室

■開催日：二〇一三年八月二三日（金）～二六日（月）
■宿泊場所：五加自治会館
■参加者：附属鎌倉小学校 五・六年生 有志二〇名
■引率者：髙松智行　鴫谷誉人　古閑賢二　小澤遼　石黒奈央（附属鎌倉小学校教諭）

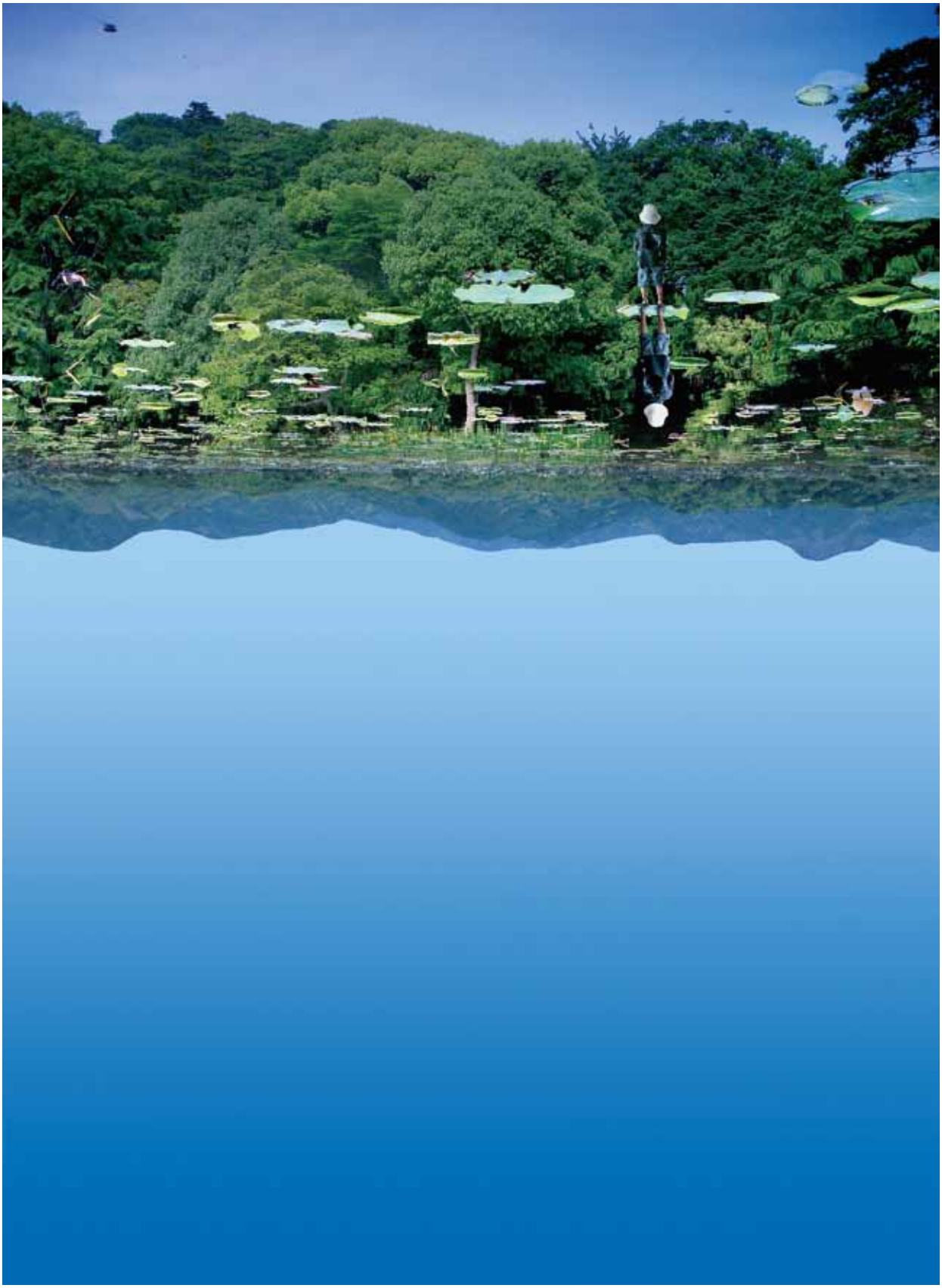
■URL：『蓮池通信』http://www.group-rough.net/museum（検索：蓮池通信）
■お問い合わせ：nantokanale2012@gmail.com（『鎌倉市・上田市　姉妹都市交流プロジェクト』実行委員会）

上田市、地元自治会、実行委員会、理解ある保護者の皆様をはじめ、
本プロジェクトに関わっていただいたすべての方々に心より感謝いたします。
今年度の試みを起点に、次年度以降も子どもたちの自立に向けた交流を図っていきます。
引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

髙松智行（『鎌倉市・上田市 姉妹都市交流プロジェクト』発起人）



※本プロジェクトは、かつて編者の研究同人であった木村光男教諭の『津南廃校活用』、
岡田渉教諭の『Beautiful Dreamers 』の実践を参考に再構築した試みです。
お二人の先生に、この場をお借りして感謝申し上げます。



『鎌倉市・上田市 姉妹都市交流プロジェクト』
平成 25 年（2013 年）11 月 5 日発行　　編者　髙松 智行　※本書の無断転載・複製を禁じます。